In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	パイドラーの変貌：エウリーピデース『ヒッポリュトス』709,728 行
Author	丹下, 和彦
Citation	人文研究. 46 巻 12 号, p.823-844.
Issue Date	1994
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第 46 巻　第12分冊1994年101頁～122頁

パイドラーの変貌
－エウリーピデース『ヒッポリュトス』709, 728行－

丹　下　和　彦

I

エウリーピデースの悲劇『ヒッポリュトス』の半ばあたり，709行に次のようなパイドラーの台詞が見える。

わたしのことはわたしがうまく始末してみせます。[1)]

これは彼女の乳母に向けて言われたものであるが，そこにはかなり強い断定的な語調が見て取れる。そしてこの断定的な語調に，わたしたちはある種の違和感を抱く。それまでのパイドラーの姿とは相容れない感じがするからである。

これより前，パイドラーは義理の息子ヒッポリュトスへの密かな，しかも許されざる恋に悩み，その内心の葛藤に疲れ果て，食を断って自死を計るまでに至る。女主人の衰弱した姿に驚いた乳母は言葉巧みに宥め賺し，パイドラーの胸と歯の垣根を取り払い，その秘め事を聞き出してしまう。女主人の衰弱の原因が不倫の恋にあったことはさすがに乳母を驚かせるが，世故に長け，現実的な生活巧者である彼女は，「しかし今いちばん肝心なのは／おいのちを大切にしていただくということ　496－97」であると，倫理的な善し悪しよりもまず生きることを最優先し，パイドラーの命を守りつつ不倫の恋をも成就させることを画策する。

このことはばあやがうまくとりはからいましょう。　521

という言葉どおり，乳母はパイドラーの気持ちをヒッポリュトスに取り次ぐが，これは相手から強い拒絶を受ける。二人の話を立ち聞きするパイドラーの耳に聞こえてきたのは，「悪を誘うとりもち婆(ばば)あ，あるじの床(とこ)を裏切る奴め 590」というような激しい罵倒の言葉であった。周旋は失敗に終わる。乳母はなお画策を続けようとする。「でも姫様，今からでもまだ救われる道はございます　705」。

いやもう何も言うなと，これを遮って言われたのが冒頭に挙げた 709 行の台詞である。失恋への苛立ちと乳母への非難に裏打ちされた強い断定の調子が，ここには含まれている。これまでのパイドラーには，その言動にこれほどまでの強さはなかった。突然恋の神エロースの襲来を受けた彼女は，「恋の苦に打ちすえられて／悶え苦しみ，惨めにも痩せ衰えていく，／ただ黙したままで　38－40」という有様であった。その具体的な姿は，彼女自身の口から以下のように言われている。

恋に傷つけられてからは，どうしたらそれにいちばんよく
耐えていけるかと思案に暮れました。そこでまず最初にしたことは
ただ黙ってこの患(わずら)いを隠すことだったのです。　392－94

二番目には操を守ることによってこの心の迷いを打ち伏せ，
立派に耐えていこうとしてみました。　398－99

そして三番目に，こうしたことではキュプリス様に
勝つことができなかったので，死ぬ決心をしたのです。　400－01

彼女がエロース（この場合には“不倫の”という形容詞が付く）を死を賭してまで抑えようというのは，それが彼女の生活を規制している倫理観と抵触するからである。「こんどのことは実際に犯せばもちろんのこと，これを患っているだけでも不名誉となることを／わたしは承知しておりました 405－06」という言葉のとおり，それはまず名誉 εὔκλεια の問題である。アテーナイ王妃という上流貴夫人の行動を規制するのは，この名誉及びこれと関連する恥 αἰδώς の概念（これまた劇中に多く言及されているものである）[21] である。パイドラーは，恥を知り名誉を重んじる女性としてまず規定される。

名誉と恥という倫理規定は人に抑制的な行動を要求する。パイドラーの場

合には，それが沈黙 σιγᾶν という一語に集約される。先に挙げたように，不倫の恋に気づいた彼女は「黙って σιγᾶν それを隠すこと　394」に専念した。乳母の巧みな誘導によって不倫の恋が表に出されるときも，彼女は相手の名前を決して口外しようとしない。

パイドラー　どなたと言ってよいか，それはあのアマゾーンのお子の…。

乳母　とおっしゃいますと，ヒッポリュトス様？

パイドラー　それを言ったのはばあやよ，わたしではありませんよ。

351－52

もちろんこれは恋する者特有の恥らいとまた保身のための狡智であると，まずは解されるべきである。しかしそれを承知の上でさらに言えば，ここのパイドラーの態度はその姿を象徴的に表わすものと言い得るであろう。彼女は不倫の恋を告白しながら，告白していない。実際行動の場合でもそうである。相手に対する求愛の告白は，彼女ではなく乳母によってなされる。パイドラーはヒッポリュトスに対しては一言も口を利かない。沈黙の立場を守り続ける。恥と名誉を倫理規定として標榜する彼女にとって，沈黙は必然的な態度行動であった。彼女はひたすら沈黙を守り，すべてを乳母に代弁させ，代理行動をとらせる。舞台上でヒッポリュトスに会うことも，一度としてない。それが彼女にとって恥知らずにならず，不名誉の烙印を押されずに生活することであった。

以上がこの劇のパイドラーの凡その姿である。そして実は，これはすでにプロロゴスで告知されていたことでもあった。先にも挙げたが，エロースの襲来を受けたパイドラーは「ただ黙したままで σιγῇ（痩せ衰えていく）39－40」と言われている。また彼女は，「名誉ある εὐκλεής 者としてではあるが（やはり死なねばならない）47」とも言われている。＜名誉＞と＜沈黙＞。上に述べてきた，彼女の姿を表示するふたつのキイ・ワードが，すでにプロロゴスで明示されているのである。この劇のパイドラー像は，このプロロゴスでのキイ・ワードに添って展開してきたものと見做してよいのである。

その彼女が709行に至って，突然――決して誇張ではなく――その姿を変える。彼女は沈黙を破り，自らを主張する。いや実際は，彼女は自らの，そして子供たちの名誉を守るために自死を決意するのであるが，その折ヒッポ

リュトスを讒訴する遺書を残す。文字は声を出さない。しかし雄弁である。「書き板は呪いを叫ぶ βοᾷ　877」のである。かくして＜沈黙＞は破られる。

この突然の――もう一度この語を使いたい――変貌は何ゆえであろうか。恋に破れた腹いせであろうか。愛と裏腹の憎しみの表明であろうか。それともパーシパエー譲りの血，恋に激しいクレータ女の気質のひとつの現れであろうか。[3] この709行は，劇の後半の狂言廻しを演じる讒訴の遺書を呼び出す前触れである。その意味で劇のターニング・ポイントを形成するものと言ってよいが，同時にそれはパイドラー像をも画然と二色に分けてしまう。しかもそこに不自然さを残す。これはなぜそうなのか。

II

この作品は改作である。少くとも同じヒッポリュトス伝説を素材とする同じエウリーピデースの作品がもう1作あった（全41行の断片のみ残存）。そしておそらくそれは前428年より以前に上演されたものであったらしい。[4] ギリシア悲劇の改作は珍しい。少なくとも現存する作品の中では唯一のものである。同一の素材を複数の作家が競作する例は数多くあるが，同一素材を同一作者が再度取り上げて作品化する例は珍しい。そこにはそれ相当の理由があったと考えなければならない。

その理由を考えるためのひとつの大きな手掛りになりそうなものは，ビュザンティオンのアリストパネースが付けた梗概である。そこには，「これが第2作目として書かれたと思われるのは，不適切な，非難に値する点がこの劇で修正されているからである」という条りがある。加えて新旧ふたつの『ヒッポリュトス』が，それぞれ『顔を掩うヒッポリュトス *Ἱππόλυτος Καλυπτόμενος*』（第1作）と『花冠を捧げるヒッポリュトス *Ἱ. Στεφανηφόρος*』（第2作）と，古代から（おそらくはエウリーピデース以降，ビュザンティオンのアリストパネース以前）[5] すでに呼び慣わされていたという事実がある。さらに第1作の断片の中の以下の一節を付け合わせて考えてみると，改作の理由の一端がおぼろげながら浮かび上がってくる。

どんな道なきところにもたやすく道を見出す神
神々の中でも最も抗(あらが)い難い神エロースが，
わたしのこの大胆な行動の教師なのです。[6]　　Fr. 430　Nauck

「大胆な行動 τόλμης καὶ θράσους」とは，ヒッポリュトスに対するパイドラーの直接行動＝求愛行為を意味するであろう。[7] それはヒッポリュトスをして思わず顔を掩わしむる καλυπτόμενος ほどのものであった。そしてそれは「不適切で ἀπρεπές 非難に価する κατηγορίας ἄξιον」との世評を浴びたのである。[8]

おそらくエウリーピデースはこの評価を覆そうとしたのであろう。[9] 第Ⅰ章で見たように，第2『ヒッポリュトス』におけるパイドラーは＜名誉＞と＜沈黙＞というふたつのキイ・ワードで捉えられた。それは＜大胆 τόλμης＞とは正反対の姿である。ここには作者のパイドラー像に対する意図的な転換を読み取ることができるであろう。諸家も評するように，エウリーピデースは第2作ではパイドラーを，第1作とは違って“高貴な婦人”に描こうとしたと言い得る。[10] エウリーピデースが違えて書こうとしたのは，しかしパイドラー像だけではないであろう。Barrett は第1『ヒッポリュトス』の劇の骨格を次のように想定している。[11]

劇の場となるのはアテーナイ。プロロゴスを語るのは女神アプロディーテーではなく，パイドラーかもしくは乳母。パイドラーは厚顔無恥なる女性に描かれており，自ら舞台上でヒッポリュトスに愛を告げる。そして彼女は劇の中途でではなく最終場面で自殺する。真実をテーセウスに告げてヒッポリュトスの無実を証明する役は，おそらく乳母である。最後にヒッポリュトス信仰の縁起を告げるデウス・エクス・マーキナーが付く。

これはもちろん仮説である。しかし残存する僅かな断片から見ても，ほぼ妥当とされるものであろう。そしてこれは結局，新旧2作品の主たる相違点を対照化させたことになる。[12]

ここでわたしたちが注意したいのは，プロロゴスを担当する者が神ではなく人間と想定されていることである。このことは，実は劇中におけるパイドラー像の構築と関係している。劇中のパイドラーが強ければプロロゴスに神は必要でなく，弱ければ神を必要とする。第2『ヒッポリュトス』のパイドラーは，プロロゴスでの予告どおり＜名誉＞を生きる上での指針とし，苦悩を＜沈黙＞によって耐え忍ぼうとする姿に描かれている。それは，不倫の恋という現実の事態に具体的に対処するだけの責任ある行動力が彼女には欠落しているということである。彼女の全身を差配しているのは神アプロディーテーである。不倫の恋，「これこそわたしの謀らいによる τοῖς ἐμοῖς βουλεύμασιν 28」と，アプロディーテーは言明している。逆に，パイドラーの苦悩

と破壊の元凶であるエロースが神の謀らいによるものとすれば，パイドラーは<名誉>と<沈黙>を標榜する姿に，そしてあらゆる行動への責任を放棄した姿に描かれるのは当然のことでもある。[13]

神のプロロゴスは，おそらく意図的なものであった。いわゆる“弱いパイドラー像”を描き出すためには必然的な措置であった。

しかしながら神のプロロゴスか劇の状況，人物の行動をすべて支配するわけではない。プロロゴスでの予告どおりに筋が運ばない場合もあるのである。アプロディーテーがプロロゴスで次のように言う条りがある。

> だがこの恋がこのままで終わることはない。
> わたしがこれをテーセウスに知らせ，事は明るみに出ることになろう。　41－42

アプロディーテー自身が不倫の恋の秘密をテーセウスに「暴露する δείξω」と言う。しかしこれはあり得ないことである。もしそうなれば，テーセウスの怒りは妻のパイドラーに向けられこそすれ，ヒッポリュトスに向けられることはまずあり得ず，従ってヒッポリュトスの破滅という劇の筋立ては成り立たなくなるからである。[14] 実際アプロディーテーがテーセウスにこの件について告げるところは，劇中のどこにもない。アプロディーテーは嘘を言ったのか。これは観客へのまやかしなのか。

不倫の恋の秘密がテーセウスに暴露されるのは，パイドラーの遺書 δέλτος によってである。それは，ある意味で神の力の及ばない，人間の手による事件の展開である。いや，神の力は絶大で，すべてがヒッポリュトスの破滅へと収斂するように計画されているのであり，ここの意味も「わたしが（パイドラーをして讒訴の遺書を残させることによって不倫の恋の秘密を）テーセウスに知らせる」ととるべきであると言うことができるかもしれない。しかしそこまでもってまわった言い方をする必要があるのかどうか。むしろそれは，709 行及び 728 行以下の“強いパイドラー”を呼び出すためのひとつの仕掛けと見るべきであろう。アプロディーテーとパイドラー。破滅の計画者アプロディーテーとその計画に乗せられ，ただ<名誉>と<沈黙>に規制されるままに生きるパイドラー。一方，アプロディーテーの計画の中に潜む虚偽欺瞞と，それを補うかの如く作用するパイドラーの変貌。この間の事情を以下にテクストに添いつつ，やや詳しく見てみたい。

Ⅲ

その前にひとつふたつ付け加えておきたい。プロロゴスのことである。

Erbse は，47 行の「またパイドラーも名誉ある者としてではあるが，やはり死なねばならない」を取り上げて，これを聞いた賢明なる観衆は“今度は dieses Mal”高貴なるパイドラーが登場するだろうと推測できた筈であると言っている。[15] その通りであろう。そしてその逆のことも当然また言えるのではないか。すなわち，作者はここで“今度は dieses Mal”高貴な性格のパイドラーを登場せしめるつもりであると言明しているということである。40 行の「黙したままで σιγῇ」も同様である。作者は，“今度のパイドラー”は（前作と異なって）「黙したままで σιγῇ（痩せ衰えていく）」と言っているのである。すなわち作者は，プロロゴスを前作で犯した失態の弁明の場として使用しているのである。いや改作のプロロゴスは必然的にそういう要素を伴うと言ったほうがよい。

一般的に言って，プロロゴスが観客に劇の内容に関する作者からの情報を提供するものであるとすれば，そこに劇の成立をめぐる作者の私的情報がまぎれ込む，否まぎれ込まされることがあっても不思議ではない。しかも今の場合は改作である。

ローマ喜劇のテレンティウス『義母 Hecyra』のプロログスは，2 度の上演失敗と，それでもその都度上演を試みようとする熱意を観客に訴えている。[16] これは改作ではない。再演である。しかもギリシアとローマという時代差がある。悲劇と喜劇というジャンルの別もある。しかし原則として悲劇でも喜劇でも，プロロゴスが作者あるいは演出者の観客に対する私的メッセージを盛り込むのに適した場であることは間違いなかろう。そしてエウリーピデースがそれを試みたのではないかということは，充分考慮するに価することであろうと思われる。[17] 彼は，前作との相違点をここで強調しておきたかった筈なのである。40 行の「黙したままで σιγῇ」と 47 行の「名誉ある者として εὐκλεής」，すなわち＜沈黙＞と＜名誉＞は，改作に伴う作者からの観客へのメッセージとして聞き得るのである。

今ひとつは，神によるプロロゴスという作劇技法の持つもうひとつの機能的側面である。第 1『ヒッポリュトス』のパイドラーは「大胆 τόλμης」で，いわば“強いパイドラー”である。この場合は神のプロロゴスはない。第 2『ヒッポリュトス』のパイドラーは「静かで σιγῇ」，「名誉を重んじる εὐκλεής」

人柄であり，いわば“弱いパイドラー”である。決して行動的ではない。この場合には神のプロロゴスが付く。パイドラーの破滅，ひいてはヒッポリュトスの破滅というこの劇の究極の目的を描くのに，神のプロロゴスはあっても描けるし，また無くても描ける。パイドラーの性格を変えることによって，その有無が左右される。今，第2『ヒッポリュトス』のアプロディーテーは，第1『ヒッポリュトス』のパイドラーからその「大胆 τόλμης」な部分を代替して引き受け，「静かで σιγῇ」，「名誉を重んじる εὐκλεής」パイドラーを創り出した。世評がそれを要求したからである。ここでは神のプロロゴスが，ごく機能的な＜機関＞として使用されている。＜機関＞であれば取りはずしがきく。

おそらくは世評に押されてパイドラー像の改良を意図した作者は，神のプロロゴスを採用することにより，「大胆 τόλμης」なパイドラーから「静かで σιγῇ」，「名誉を重んじる εὐκλεής」パイドラー像へと作り変えた。そしてそのことを私的なメッセージとして，予めアプロディーテーの口から言わしめたのである。

以上は，しかし仮説である。

Ⅳ

プロロゴスのアプロディーテーの言葉どおり，この劇（第2『ヒッポリュトス』）のパイドラーは，「黙ったまま σιγῇ」もの静かで，「名誉を重んじる εὐκλεής」姿を見せている。それゆえ恋に悩みながらも，相手にその意を伝えることもできない。その彼女の行動力の無さを現実の場で補うのが乳母である。パイドラーから不倫の恋を打ち明けられた乳母は，その善後策を講じることになる。

このことはばあやがうまく καλῶς とりはからいましょう。　521

乳母の対策の第1原則は，苦悩の果てに死を求める女主人の命を救うことである。「うまく καλῶς」には，Winnington-Ingram も指摘するように，[18] 命を保持するという意味が含まれているであろう。しかしそれだけではない。命を救った上でなおヒッポリュトスとの間に，テーセウスには内緒で不倫の恋を成立させたいとの意も認められていよう。そういう含みで，乳母はヒッ

ポリュトスに話を通すのである。パイドラーも，この恋が秘密裡に，つまり彼女にとって「名誉が守られたままで εὐκλεής」成立することを期待している節が，その言葉の端々に読み取れる。

乳母はヒッポリュトスに話を通す。その遣り取りが館外にまで聞こえてくる。するともなしにパイドラーは立ち聞きすることになる。

わたしはもうおしまいです。この門のところに立って
聞いてごらんなさい。どんな騒ぎが館を襲っているか。　575－76

ええ，それにはっきりと罵る声が聞こえます，
「悪を誘うとりもち婆あ，あるじの床を裏切る奴め」と。　589－90

乳母の策は失敗に終わる。彼女にはヒッポリュトスの気持ちが計り切れなかったのである。さらに，館外で聞いていたパイドラーに次の一言が決定的な打撃を与える。

舌は誓ったが，心は誓わなかったのだ。　612

これは秘密保持を請願する乳母に向って言われたヒッポリュトスの言葉である。そしてこれは秘密の暴露を示唆している。[19] 拒絶に加うるに秘密の暴露は，パイドラーにさらなる不名誉をもたらすであろう。彼女は名誉を維持するための措置を講じる必要がある。

この傷を，友よ，どう隠せよう。
神々にせよ，人にせよ，立ち現われて，
過誤を犯したわたしを助け，あるいは庇い，
あるいは支えてくれる誰があろう。この苦しみが
わたしにこの世の境を越え行かせる，　674－78

「この傷 πῆμα」とは，端的には失恋の痛手を指していよう。加えて，漏れたら困る不祥事の意もある。[20] だからこそ表沙汰にせず，「隠す κρύφω」必要があるのである。さらにパイドラーを悩ませるのは心の傷だけではない。同時に「過誤を犯した ἀδίκων ἔργων」という自覚がある。過誤とは乳母の手を借

りて実行せしめた求愛行為を指していよう。それは，今となっては彼女にとって不正な *ἄδικος* ことであった。

この傷の意識，受動的な災禍の意識と罪の意識，能動的な過誤の意識とが，彼女に死を覚悟させる。「この世の境を越える」とは，死ぬということに外ならない。以前にも彼女は死を覚悟したことがあった。心中でのキュプリスとの葛藤に破れそうになったときである（400－01）。それは名誉を守るためであった。「実際に犯せばもちろんのこと，これを患っているだけでも不名誉 *δυσκλεᾶ* となる　405」からであった。今の場合，彼女は患っているだけではない。さらに一歩踏み出している。乳母をして不倫の恋の告白をせしめたことは，「実際に犯した行為 *τὸ ἔργον*」である。このことが彼女に罪の意識として跳ね返ってくる。しかも事は不首尾に終った。傷の意識が同時に彼女を苛む。

今わたしに必要なのは新しい手立て。
あの人は怒りに心を苛立たせて，
おまえの仕出かしたことでわたしを父親に訴えるでしょう。
そしてピッテウス様にもこの凶事（まがごと）を話し，
ついには国じゅうにこのひどく恥ずかしい噂（うわさ）を広めてしまうでしょう。　688－92

これは，ヒッポリュトスの許から戻ってきた乳母に向って言われた言葉である。「恥ずかしい噂 *αἰσχίστων λόγων*」を阻止するための「新しい手立て *καινῶν λόγων*」が模索されねばならない。しかしそれはもう乳母の手によってではない。再度救済策を進言しようとする乳母を遮って，パイドラーは言う。

わたしのことはわたしがうまく *καλῶς* 始末してみせます。　709

521 行と同じく，ここでも「うまく *καλῶς*」という語が使われている。しかしその意味するところは違う。再び Winnington-Ingram に拠れば，ここは「名誉を伴って honourably」[21] という意味である。命の保持は，もう問題とはならない。名誉が問題である。この間の相違は，いうまでもなく乳母とパイドラーとの今回の事態に対する姿勢の相違を表わしている。それはすなわ

ち両人の人生に処する指針，生き方の相違でもある。そしてまたこれは，今回の事態に対処する主体の交替を意味するものでもあるのである。不倫の恋に悩むパイドラーは，「名誉を重んじ εὐκλεής」，「沈黙を守る σιγῇ」がゆえに，具体的行動がとれない。行動の主導権は乳母に委ねられる。しかしそれが失敗する。パイドラーは「名誉を重んじ εὐκλεής」，乳母と交替して自ら行動に立つ。それがこの709行の持つひとつの意味である。事実，乳母はこのパイドラーの言葉を最後に舞台を去り，2度と登場しない。これはパイドラーの，乳母との物理的かつ精神的訣別を示す1行であると言い得よう。

自ら主体的に行動し始めたパイドラーは，模索していた新しい手立てを発見する。

わたしのこの禍に片をつけるある手立てを見つけたのです，
子供たちには誉れある生涯を送らせてやり，
わたし自身もまた今のこのめぐりあわせから有利に事を運ぶ，そのための手はずです。
わずかひとつのいのちを救うために，クレーテーの実家を辱（はずかし）めたり，
こんな不名誉を身に受けたままで，テーセウス様の
面前に出たりは決してしない覚悟です。　716－21

死のうと思います。ただどうやるか，それがわたしの工夫のしどころです。　723

新しく見つけた「手立て εὕρημα」は，彼女と，それに子供たちの名誉も保持するものでなければならない。彼女は最後まで＜名誉＞にこだわる。そしてその手立てとは，「死のうと思う θανεῖν」という言葉どおり，死ぬことである。命を惜んで実家の名を辱めたり，不名誉のまま夫と顔を合わすことはしたくないと言う。[22] 名誉を保持したままの自死――プロロゴスで予告されていた名誉ある死（47行）が，ここで成就されることになる。

しかし彼女はただ死ぬだけではない。自らの死と引き換えに，何らかの事件の出来を促すことを暗示している。723行の後半がそれである。「どうやって ὅπως 死ぬか」とは，Barrett も言うとおり（*op.cit.* ad723），単に自殺の仕方を述べるに止まるものではない。これをさらに具体的に述べたものが，次

の詩句である。

わたしを滅ぼすおつもりのキュプリス様は
今日というこの日，一つのいのちが亡くなることで，
さぞやお喜びになることでしょう。わたしはこの辛い恋に負けてし
まうのです。
でも ἀτάρ わたしは死んで，もうひとりの人にも
禍となってやります，わたしのこの不幸を見て勝ち誇ってばかりは
いられないことを思い知らせてやるのです。　725－30

前半は，パイドラーが神アプロディーテーの計画 βουλεύμασιν（28行）どおり，恋の犠牲者となったことの確認である。しかし728行冒頭の「でも ἀτάρ」という接続詞によって局面は大きく転換する。彼女は，自ら死んでもうひとりの人間すなわちヒッポリュトスの禍となってやると明言している。723行の「どうやって ὅπως」死ぬかの答えである（但しまだ充分に具体的とは言えない。あとになって，それは讒訴の遺書を残すことであったことが知れる）。彼女はプロロゴスの神の計画どおり「名誉を保持して εὐκλεής」死ぬが，「黙ったまま σιγῇ」死ぬわけではない。遺書を残すことによって，彼女は「叫ぶ βοᾷ」のである。いや，黙ったまま音声を発せずに，文字によって叫ぶのである。728行の冒頭の「でも ἀτάρ」は，この沈黙から叫び，陳述への転換点をなす。それはプロロゴスに示されていた神の計画に反対し，パイドラーが自らの力で行動し始めたことを示す。709行のパイドラーが乳母との訣別を示すものであったと同様に，この728行のパイドラーはプロロゴスのアプロディーテーとの訣別を告げるのである。

V

「でも ἀτάρ　728」という逆接の接続詞が切り分ける淵は広く深い。それまでのパイドラーはアプロディーテーの計画どおりに動く＜道具＞であった。具体的には，乳母に導かれるがままに＜沈黙＞と＜名誉＞とを守り，恋の犠牲となって果てて行こうとする。しかし「でも ἀτάρ」という接続詞は，そうした彼女の姿を一変させてしまう。「死んでもうひとりの人にも禍となってやる」という言葉どおり，彼女は行動を意図する。これがヒッポリュトスを

讒訴する遺書（書き板）δέλτος を残すことであった。遺書は雄弁である。無言でありながら雄弁である。＜沈黙＞は破られる。従来のパイドラーとは違う意外な姿の，もうひとりのパイドラーがここに現われ出る。すでに「わたしのことはわたしがうまく始末をつけてみせます　709」と言ったときから，パイドラーはその変貌の一端を見せ始めていたが，この「でも τάρ」に至って判然とその変貌を告げるのである。この変貌はどのように解釈されるべきであろうか。

劇の筋の展開上，あるいはヒッポリュトスの破滅という劇の目的――アプロディーテーはすでにプロロゴスでそう宣言している――からいえば，＜名誉＞を気遣い，＜沈黙＞を守るばかりのパイドラーでは用をなさない。それではまたアプロディーテーの＜道具＞とはなれないのである。パイドラーはヒッポリュトスの破滅に関与するだけの敵役としての側面を持たなければならない。

＜名誉＞と＜沈黙＞を旨とするパイドラー像は，前作で辛辣な世評を浴びたエウリーピデースがそれを踏まえて創り出した新しいパイドラー像であった。しかし作者はまた劇の筋の要請にも応えなければならない。パイドラーは毒性の触媒として，ヒッポリュトスの破滅に関わらなければならないのである。この互いに相反するふたつのパイドラー像は，いかにして過不足なく結び合わされるであろうか。プロロゴスのアプロディーテーはこの間の事情を次のように述べている。

だがこの恋がこのままで終わることはない。
わたしがこれをテーセウスに知らせ，事は明るみに出ることになろう。
そしてわたしに敵対するあの若者は
父親が呪い殺すことになろう。

41－44

これは，パイドラーの不倫の恋がついにはヒッポリュトスの破滅に繋っていくことを述べたものである。しかもアプロディーテー自身がそれを繋げると述べている。まさにこの劇の要点の告示と言ってよい。

ところでテーセウスが息子ヒッポリュトスに呪いをかけるほどに怒るためには，この不倫の恋がヒッポリュトスに罪がかかる形で暴露されねばならな

い。しかし上のアプロディーテーの言うところは，母親の息子に対する不倫の恋を父親テーセウスに教え知らせるというだけのことである。テーセウスは妻の不行跡に対して怒りこそすれ，息子ヒッポリュトスに呪いをかけるまでに怒る理由はない。ヒッポリュトスに怒りを向けるには，ヒッポリュトスのほうから不倫の恋を仕掛けた場合でなければなるまい。しかしその事実はない。

42行は曖昧な1行である。それは虚偽とも言えるし，虚偽でないとも言えるように見えるからである。虚偽というのは，以下終曲に至るまでアプロディーテーが不倫の恋の情報をテーセウスに告げる箇処は一切ないからである。虚偽でないかもしれないというのは，神が自ら直接にではなく，誰か他の人間（この場合はパイドラー）を介して事実とは正反対の話をテーセウスに告げせしめることは不可能ではないからである。しかしこれはどうであろうか。42行の *δείξω δὲ Θησεῖ πρᾶγμα, κἀκφανήσεται.* の正確な解釈は，「わたしがそのこと（不倫の恋）をテーセウスに告げよう。そうすると事態は明るみに出るであろう」ということである。アプロディーテーは，「わたしが告げよう *δείξω*」と言っている。ここには他者の介在を予想させるものは一切ない。アプロディーテーの言葉と，実際に不倫の恋が事実とは正反対の内容となってテーセウスに伝わったいきさつとは無関係である，と言わねばならない。

やはり神には不倫の恋をテーセウスに告げることは，実際上不可能なのである。事実を正確に告げればテーセウスは妻パイドラーに対して怒らざるを得ず，筋の展開と全くはずれてしまうことになるからである。といって事実を曲げて伝えることは，神には許されない。そんなことをすれば劇は混乱してしまうであろう（神による嘘の情報が許されるのは観客に対してだけである）。従って，このプロロゴスの情報は（観客に対する）虚偽の情報であると言わねばならない。＜名誉＞を保持し＜沈黙＞を守るパイドラーを創出したがゆえに，アプロディーテーは虚偽の情報を告げねばならぬ羽目になる。さっきの今である。同じプロロゴスの中で＜大胆な＞パイドラーをも並べて予示することはできないであろうからである。

テーセウスに事実と反対の内容の報告ができる人物は，乳母かパイドラーしかいない。作者は，乳母をこれより前に舞台から退場させ，この役をパイドラーに割り当てた。彼女は＜名誉＞と＜沈黙＞を捨て，毒性をもつ触媒へと変貌を余儀なくさせられる。すなわちプロロゴスのアプロディーテーのあ

の虚偽の情報（42行）は，このパイドラーの変貌を結果的に準備し予告するものであったことになる。ここで作者は意図的である。しかし一方，変貌するにはそれ相応の内的動機がなければなるまい。それは果してあるだろうか。

VI

この変貌するパイドラーの姿は，時にその出自と絡めて考えられることがある。彼女の母親は牡牛を愛して怪物ミーノータウロスを生んだクレータ王妃パーシパエーである。また姉はディオニューソスを裏切ってテーセウスに恋したアリアドネーである。[23] この母と姉の異常な愛を，自らの不倫の恋と比べつつ嘆く条りがある（337行）。この遺伝的体質をもって彼女の変貌の遠因と見做すことも，不可能ではないように思われる。しかし彼女の行動をすべて血統とか遺伝体質とかいう特殊条件下で考えることは如何であろうか。

元来パイドラーにはパーシパエー譲りの血が眠っていた。常々それはギリシア貴族社会を規制する倫理によって抑制されていた。その彼女の本性ピュシスと社会的規範ノモス，いわば自然と文化の確執ののち，その素顔が露見した。それは旧いパイドラー像を彷彿とさせる姿である，とする説がある。[24] これはこの劇のパイドラーの姿をほぼ説明し尽した感がある。おそらく大筋ではその通りであろうかとも思われる。しかし敢えてこだわれば，なお728行の「でも ἀτάρ」が切り分ける淵は深く広いと言わざるを得ないのである。深淵を越える跳躍を支える内的動機を遺伝的な血だけで説明するのは難しいと思われる。いや，それだけでは安易に過ぎるとも言い得よう。それだけでは恋に陥り易いパイドラーの性情は説明できても，エロースが憎しみに変質し讒訴の手紙を書くに至るまでの心の軌跡は説明され得ないのである。

むしろパイドラーの変貌はクレータ女というその出自だけに限定せず，より一般化した人間の性情という面からも考えられるべきではないか。それは愛のエゴイズムということである。パイドラーをして讒訴の遺書を書かせるのは，愛の裏返しの憎しみ，また傷つけられた自尊心である。それは恋の勝者に対する敗者の側からの復讐である（727行以下）。そしてパイドラーには，この復讐に奔るだけの素地が皆無であったとは言い得ない。不倫の恋に陥った彼女は，自分と子供，それに夫の名誉には配慮するが（例えば420－21行），肝心の相手ヒッポリュトスの迷惑は一切考えない。[25] 恋する者特有のこ

ととはいえ，彼女にはそういう身勝手さがある。その彼女が失恋の腹いせに虚偽の告発に奔ることは，充分考えられることである。しかしそれでもなお，＜沈黙＞と＜名誉＞を標榜するパイドラーから讒訴の遺書を書くパイドラーまでには埋め切れない距離があるように思われる。

Méridier はヒッポリュトスに対して虚偽の告発をするパイドラー像を取り上げて，それまでの彼女に対する同情の念を危うくするものであると断じている。そしてそういう行動を取るパイドラーをアプロディーテーの手に導かれてのものとするよりはむしろ，死よりもなお悪い不名誉を避けるためのものと考えるべきであるとし，さらにそこに彼女の苦悩の深さ，自尊心の強さを見て取るべきであるとしている。[26] ここには，パイドラー像をなんとか一貫した人物像として捉えようとする熱意が窺われるが，しかしまさにこのことこそ，不倫の恋に苦悩するパイドラーと讒訴の遺書を残すパイドラーとの間の不連続性を Méridier もまた感じ取っていることを明示するものであろう。

この不連続性はピュシスとノモスの対立によるものではなくて，全く別のものではないか。この深淵はピュシスとノモスの，越えようと思えば越えられる深淵ではなくて，別次元のものではないか。パイドラーはメーデイアの如く，理性と感性の対立及び感性の勝利を描いているように見えて，実はそうではない。709 行以前のパイドラーとそれ以後のパイドラーは同次元にいない。全くの別人なのである。

以上見たように，讒訴の遺書を残す強いパイドラーの姿を劇中の他の部分に見つけることは容易ではない。しかし第 1『ヒッポリュトス』の中になら，簡単に見出すことができる。次の断片はどうであろうか。

> （わたしの手から）解放されたあなたがわたしを中傷した場合，あなたはどんな目に遭わねばならないのか。
>
> Fr. 435　Nauck

これは，パイドラーがヒッポリュトスにすがりついて秘密保持のための沈黙を誓わせているところと推定される。[27] ここに見られるのは愛のエゴイズムである。パイドラーには相手ヒッポリュトスの気持ちを思い遣る心は一切ない。あるのは我が身可愛さだけである。「沈黙を守らねばどうなるか（あとは死だ）」と恫喝するパイドラーは，「わたしのこの不幸を見て勝ち誇ってば

かりは／いられないことを思い知らせてやる　729－30」という第2『ヒッポリュトス』のパイドラーと，殆んど変わるところがない。ここから讒訴の遺書を残すパイドラーまで，あと半歩もないであろう。728行の「でも ἀτάρ」を境に，パイドラーは第1『ヒッポリュトス』のパイドラーに変貌あるいは回帰するのである。プロロゴスにおけるあのアプロディーテーの虚偽の告示は，このパイドラーの変貌あるいは回帰を許容するためのものであった。

しかしこのパイドラーは伝説の闇の中のパイドラーとは異なる。第1『ヒッポリュトス』で描かれたパイドラーが，伝説の闇の中の，文化の味を知らぬ，野蛮なクレータ女であるとは一概に言えないのである。パイドラーは野蛮なクレータ女であるがゆえに，異常な恋に執着するその血統のゆえに，直接求愛の告白をしたりあるいは讒訴の遺書を残したりするというふうに解されるべきではない。愛に憑かれた者ならば誰しもそうする筈であるというふうに解されるべきである。ここで問題となっているのは愛の恐ろしさである。それはクレータ女に限定されぬ，人間一般に普遍されるものである。

しかも第1『ヒッポリュトス』のパイドラーは，愛という情念に憑かれた女ではあるけれども，理性を全く欠いているわけでは決してない。先に挙げた断片「どんな道なきところにもたやすく道を見出す神／神々の中でも最も抗い難い神エロースが／わたしのこの大胆な行動の教師なのです」(Fr. 430 Nauck) も，パイドラーが自分の行動（直接的な求愛）を抗い難いエロース神のせいであると弁明しながら，同時にそれが「大胆不敵なもの τόλμης καὶ θράσους」であることを自覚していることを示している。愛の情念に衝き動かされつつ，同時に自らの行動を側面から見つめている醒めた眼がある。これは決して茫漠たる伝説の闇の中のパイドラーではない。728行以下のパイドラーは，この第1『ヒッポリュトス』のパイドラーへと変貌回帰するのである。伝説のパイドラーに回帰するのではない。

Ⅶ

第Ⅰ章の冒頭に述べた，709行を聞いたときに覚えた違和感とは何なのか。また727行から728行へ続く際の違和感は何なのか。

それは，この劇に第1『ヒッポリュトス』のパイドラーと第2『ヒッポリュトス』のパイドラーとが混在していることにある。709行以前，いやもっと正確に言えば728行以前のパイドラーは，第1『ヒッポリュトス』で酷評を受

けて書き直されたパイドラーである。それに対して728行以後のパイドラーは，第1『ヒッポリュトス』のパイドラーとほぼ変わらないパイドラーであるということである。このひとりのパイドラーからもうひとりのパイドラーへの変貌あるいは回帰を本性ピュシスと社会的規範ノモスという対立の図式及びその展開と捉えることは不可能ではない。しかし前章で述べたように，パイドラーの血の中に潜む情念の目覚めだけで説明するにはその変貌はやはり突然であり，唐突である。また愛のエゴイズムという観点から変貌を捉えてみても，その間の距離は充分に埋まらなかった。そのためには，今少しパイドラーの内的動機が具体的に説明されて然るべきである。ちょうどメーデイアが本性と社会的規範の確執に悩んだ挙句，怒り *θυμός* という説明をもって子供殺しを実行したように。しかしこの *θυμός* に相当するものが第2『ヒッポリュトス』には明示されていない。[28] それは，作者がこの劇においてあまりにも優し過ぎるパイドラーを提示したからである。優しいパイドラー，すなわち＜名誉＞と＜沈黙＞を旨とするパイドラーを提示すれば，彼女のもつ＜大胆な *τόλμης*＞部分は神が肩代りしなければならない。プロロゴスのアプロディーテーである。しかし劇の目的はヒッポリュトスの破滅を描くことにある。その契機となるもの，すなわち不倫の恋に関する事実とは反対の情報の伝達を，神が肩代りすることはできない。神は，観客ならぬ登場人物には嘘を吐くことはできないからである。問題の情報をテーセウスに伝えるのは乳母かパイドラーに限られる。もし乳母とすれば，何も言わずに死んで行くことになるパイドラーは＜名誉＞と＜沈黙＞を旨とするその姿を全うすることができる代りに，肝心のヒッポリュトスとの接点を失ってしまうことになり，また乳母の語るその言葉はインパクトのない空疎なものとなってしまうであろう。それはやはりパイドラーでなければならない。パイドラーが自分でテーセウスに告げねばならない。しかも事実とは正反対の虚偽の内容を告げることを余儀なくさせられる。パイドラーを優しく描けば描くほど，虚偽の情報を告げるもうひとりのパイドラーとの間のギャップは大きくなる。これがわたしたちの感じた違和感であったのである。

エウリーピデースが当時の劇審査機構をどの程度信頼していたか，不明である。しかしこの改作で優勝を果したことには，密かに快哉を叫びほくそ笑んだことであろう。それは，目論みどおりパイドラー像を＜名誉＞と＜沈黙＞を旨とする姿に作り替えたことが功を奏したと思われたからである。しかしそれが彼の最も描きたかったパイドラー像であったかどうかは，

疑問である。

註

1）『ヒッポリュトス』の訳文は岩波版「ギリシア悲劇全集」第5巻所収の川島重成訳を使用させていただく。引用の都合で，筆者による多少の改変もあることを予めお断りしておきたい。

2）*αἰδώς* 及び *αἰδέομαι* など，その類縁語は劇中に全部で6個（78, 244, 335, 385, 998, 1258行）を数える。

3）川島は第2『ヒッポリュトス』のパイドラーはただ慎ましいだけの平凡な女性ではなく，その身中には母親パーシパエー，姉アリアドネーに繋がるクレータ女の情念の炎が眠っているとし，その本性あるいは素顔がここで露見したのであるとする。川島重成『ギリシャ悲劇の人間理解』新地書房，1983年，第6章「『ヒッポリュトス』における神々と人間」220頁及び228頁，また同岩波版「ギリシア悲劇全集」第5巻『ヒッポリュトス』解説，439頁を参照。

4）ビュザンティオンのアリストパネースによるヒュポテシス参照。

5）Cf. W.S.Barrett (ed.); *Euripides Hippolytos*, Oxford, 1964, p.10, n. 1, p.37, n. 1.

6）川島重成訳を使用させていただく。これ以外の断片訳は，岩波版「ギリシア悲劇全集」第12巻『エウリーピデース断片』所収の久保田忠利訳を使用させていただく。

7）Cf. Barrett, *op. cit.*, p.11, 18.

8）Webster はこの辛辣な世評を代表するものがアリストパネース『蛙』1043行（そこではパイドラーはステネボイアと並んで淫売婦 *πόρνη* だとされている）であるとする。cf. T.B.L. Webster; *The Tragedies of Euripides*, Methuen. 1967, p.75. 『蛙』の上演年代は前405年である。アリストパネースは新旧ふたつの『ヒッポリュトス』を知っていた筈であるが，ここではどうやら旧作のパイドラーを批判していることになる。cf. W.B. Stanford (ed.) ; *Aristophanes The Frogs*, Macmillan, 1963, ad 1043. 『エウリーピデース伝』(cf. E. Schwartz; *Scholia in Euripidem* I, Berlin, 1887, S.5) で言われているのも旧作のほうであろう。

9）ここにライヴァル，ソポクレースの『パイドラー』の存在を考えることも不可能ではない。第1『ヒッポリュトス』上演後に発表されたその『パイドラー』に刺激を受けて再度エウリーピデースが筆を執ったというのである。しかし『パイドラー』も僅か28行の断片しか残存せず，その影響力のほどは不明である。またその上演時期も，第1と第2『ヒッポリュトス』の中間であったのかどうか，確定できな

い。むしろ第2『ヒッポリュトス』執筆の動機は，作者のこの題材に対する執念に由来する内発的なものであったと見るべきであるかもしれない。松平千秋訳『ヒッポリュトス　－パイドラーの恋－』岩波文庫，解説参照。

10) Cf. A.Lesky; *Die Tragische Dichtung der Hellenen*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1972, S.324. また B.M.W. Knox; *The Hippolytus of Euripides*, Yale Classical Studies 13 (1952), In *Euripides, A Collection of Critical Essays*, ed. by E. Segal, Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs,N.J., 1968, p.102. また Barrett, *op. cit.* p.14.

11) *Op. cit.* p.11, 12.

12) 第1『ヒッポリュトス』の再構築に当っては，しばしばセネカ『パエドラ』が参考にされる。第1『ヒッポリュトス』を下敷にしてリライトしたものと想定されているからである。しかしどこまで元の作品に忠実であったかは不明である。『パエドラ』のソースが単一であったか複数であったかという点でも，研究者の意見は一致していない。

この件に関して，第1『ヒッポリュトス』とセネカ『パエドラ』との異同を考察した興味深い論考が Dingel にある。その論点のひとつを挙げれば，Dingel はセネカ劇の特徴として登場人物の＜繰り返し行為＞（たとえばパエドラはヒッポリュトゥスに求愛嘆願のため2度跪く）を挙げ，これはエウリーピデースには無いもの，非ギリシア的なものと指摘している。ただしかしこの＜繰り返し行為＞がセネカ独自のものなのか，それとも複数のソースのどれかにあったものに拠るものなのかという問題は，依然として残る。cf. J. Dingel; *Ἱππόλυτος ξιφουλκός. Zu Senecas Phaedra und dem erstem Hippolytos des Euripides*, Hermes 98 (1970), S.50.

13) パイドラー像の持つ無責任さを指摘する声は Webster, *op. cit.* p.71. また Köhnken にもある。 cf. A.Köhnken; *Götterrahmen und menschliches Handeln*, Hermes 100 (1972), S.188.

14) Cf. Barrett, *op. cit.* ad 42.

15) Cf. H.Erbse; *Studien zum Prolog der euripideischen Tragödie*, Walter de Gruyter, Berlin, New York, 1984, S.38.

16) この場合プロロゴスを述べるのは演出者（L. Ambivius Turpio）である。しかし上演の成功を祈るという点では事情は変らない。エウリーピデースも作者であると同時に演出者であった。

17) 悲劇詩人たちはすでにプロアゴーン（悲劇上演の前夜祭的なもの）において，上演

作品の内容紹介をするのが慣わしであった。プロロゴスはそれの当日版と考えてもよい。プロアゴーンの実態については，A. Pickard-Cambridge; *The Dramatic Festivals of Athens*, Oxford, 1991(1953), p.67 参照。ここで Pickard-Cambridge は，プラトーン『饗宴』194a 以下を引用してプロアゴーンの実態説明としている。『饗宴』は前 5 世紀末（『饗宴』の主人公アガトーンの優勝は前 416 年とされる）を時代背景とするか，12 年時代が遡っても，つまり第 2『ヒッポリュトス』上演時（前 428 年）においても事情はほぼ同じであったろう。

18) Cf. R.P. Winnington-Ingram; *Hippolytus: A Study in Causation*, In: *Euripide*, Entretiens sur L'Antiquité Classique, Tome VI, Vandoeuvres-Genève, 1958, p. 180.

19) 実際にはヒッポリュトスのこの誓いは破られない。のちの父親テーセウスとの論争の場でも，「お妃様が何を恐れておいのちを絶たれたのか，／それは存じません，わたしにはこれ以上申し上げることは禁じられておりますから　1032－33」とだけ言い，誓いを守る。しかしそのために彼は父親に誤解されたまま破滅しなければならない。元はといえば，怒りのために放った誓いを破りかねないようなこの曖昧な表現をパイドラーに聞かれたかためであった。

20) *πῆμα* の現行訳をいくつか挙げておこう。"my hurt" (Barrett), "my woe" (A.S. Way), "mon désastre" (L. Méridier), "mi desgracia" (A.M. González),"die Schmach" (E. Buschor).「この悩み」(内山敬二郎),「この恥」(松平千秋)。

21) *Op. cit.* p.180

22)「わずかひとつのいのちを救うために *οὕνεκα ψυχῆς μιᾶς* 721」のいのちとはパイドラーのか，それともヒッポリュトスのかという点で議論がある。Barrett は，作者はここで故意に曖昧な言い方をしていると言う（*op. cit.* p.296)。そのとおりかもしれない。しかしこれをヒッポリュトスのいのちと読んだ場合は，パイドラーはすでにこの時点でヒッポリュトスの破滅を考慮していることを示す（讒訴の遺書。これは 728 行でもっと具体的に触れられる)。その気配は皆無とは言えないが，それでは少し筋を急ぎすぎる感がある。次の 723 行の自らの死への覚悟，また 726 行の「(わたしの) いのち *ψυχῆς*」という用語との関連から考えれば，パイドラーのいのちと読み取るほうが妥当ではないか。

23) この異伝については『オデュッセイア』11，321－325 を参照。また川島『ヒッポリュトス』訳註参照。

24) 註 3) 参照。

25) Cf. Köhnken, *op. cit.* S.187.

26) Cf. L. Méridier(ed.); *Euripide*, Tome II, *Hippolyte*, Société D'Édition《Les Belles Lettres》, Paris, 1965, p.19.

27) Cf. Barrett, *op. cit.* p.19.

28) それはいうまでもなく，ここで作者が描こうとしたのは結局は＜ヒッポリュトスの悲劇＞（それもヒッポリュトスの恋ではなく，パイドラーの恋という側面から）であって，必ずしも＜パイドラーの悲劇＞ではなかったというところにも一因があるであろう。もし＜パイドラーの悲劇＞を描くつもりであれば，不倫の恋の破綻に至る過程がもっと深くパイドラーの心理の追及を通して描かれたであろう。讒訴に至る内的動機も明白にされたにちがいない。